

現代日本語「そこそこ」の諸用法

Multiple uses of *soko-soko* in modern Japanese

原 美築
HARA Mizuki

摘要

Soko-soko can be used as a noun when acting as a positional pronoun, as an adverb of manner showing that an action is completed in a short time, as a quantifier suffix indicating an estimated value, and as an adverb of degree stipulating quantity in the speaker's judgment. Its modern usage is mostly as an adverb of degree. Furthermore, while definitions differ in the existing literature, all agree that when used as an adverb of degree, *soko-soko* implies an "evaluation." However, no existing research regarding *soko-soko* mentions this function as an adverb of degree with the implication of "evaluation." Thus, this report aimed to outline the lexical meaning of these four uses of *soko-soko* from the four viewpoints of "target domain," "clarity of the speaker's internal standard," "position relative to the speaker's internal standard," and "evaluation," and discussed the mechanism by which the adverb-of-degree use indicates "evaluation." Analysis of each use clarified that whereas the target domain is limited to use as a noun or as an adverb of manner, there is little limit to its use as a suffix or adverb of degree. Regarding "clarity of the speaker's internal standard," both adverb-of-manner and adverb-of-degree uses imply an expectation that the speaker and listener share the same internal standard. Regarding "position relative to the speaker's internal standard," both suffix and adverb-of-degree uses imply that the internal standard of the speaker has been slightly surpassed. However, this result is perceived differently in the two cases: Whereas the suffix use indicates that in the speaker's opinion, the "resulting value is too small," the adverb-of-degree use indicates an evaluation on the part of the speaker that the "resulting value is "acceptable." In other words, usage as a suffix or adverb of degree differs depending on whether the speaker intends to communicate that the value in question is "too small" or that, in their subjective judgment, the value in question is "acceptable." From the above, it was concluded that *soko-soko* used as an adverb of degree assumes that the speaker has a certain internal standard that they find acceptable, and that the value in question is positioned slightly above that standard.

キーワード：そこそこ 程度副詞 評価 許容 基準

Keywords: *soko-soko*, adverb of degree, evaluation, acceptability, standard

1. はじめに

日本語の程度副詞には「評価を表す程度副詞」とされる一群がある。本稿で扱う「そこそこ」は(1)～(3)に見られるように、修飾語あるいは話題となる事柄に対する程度限定を行う用法が見られ、統語的な特徴も「評価を表す程度副詞」と合致する¹。(以下、用例は現代日本語書き言葉均衡コーパス (BCCWJ) から採取したものである。下線・囲みは筆者による。)

- (1) 銀座という場所にもかかわらず格安で使えるうえに料理もそこそこおいしく、理恵子たちはよく利用しているようだ。(雑誌：PM11_00633)
- (2) とにかく薄味。濃味だったら合格点だったんですけどねえ～。まあ、値段を考えれば、そこそこのクオリティでした。(ブログ：OY03_00271)
- (3) 背も高く容姿もそこそこだったが、そこに映った自分の姿は、やはりどう見ても少し疲れた顔をした若いサラリーマンにしか見えない。(書籍：LBm9_00216)

しかし、程度副詞を「評価」の観点から体系的に論じている工藤 (1983)、渡辺 (1990)、田和 (2017)、疏 (2018) などにおいて、「そこそこ」に関する記述は見られない。程度副詞用法を中心に、「そこそこ」の諸用法の「話し手の心内にある価値観や基準」、「その基準に対する位置づけ」、話し手による「評価 (品定め)」の実態を明らかにすることは、程度副詞が評価を表す条件、あるいは程度副詞が評価を表す仕組みを考察するための示唆を得るうえで重要であると考え。そこで、本稿では、現代日本語を中心とした「そこそこ」の用例について、先行の渡辺実の副詞論などを踏まえ「①対象領域」「②話し手の心内にある基準 (価値観) がどのように表れるか (= 基準の明示性)」「③基準 (価値観) における位置づけ」「④評価 (品定め) のあり様」の4つの観点から、用法ごとの特徴をまとめ、特に「程度を表す用法」における「そこそこ」の意味的特徴を具体的に記述することを目指す。なお、観点の名称に用いた「話し手の心内にある基準」、「基準 (価値観) における位置づけ」「評価 (品定め) のあり様」などの語句は田和 (2017) によるものを参考にしているが、内実は、田和 (2017) と全同ではない。

2. 「そこそこ」の種々の用法

現代日本語における「そこそこ」は、「評価を表す程度副詞」として用いられる割合が最も高いが、(4)のように「(前接する主語の動作や行為を表す名詞を) 急いで済ます様を表す用法」や、(5)のように数量詞に後接し、「前接の数量詞をかるうじて超えている様を表す用法」がある。

- (4) その日はよく晴れ、水面を波立たせる風もなく、私は昼食もそこそこに針金と棒をもってパイクを一匹とりに出かけた。(書籍：LBf7_00030)

(5) 目の前に立っている女は、どう見ても三十そこそこ、ひょっとしたら二十代でも通用するような美人だった。(書籍：LBc9_00061)

また、現代語においてはほとんど用いられていないが、近世以前の用例には(6)のような、「場所を示す用法」も存在する。((6)は日本語歴史コーパス(CHJ)により採取したものである。下線は筆者。)

(6) これはただ志の初めを見するなり。京のおはしまし所はそこそこになん。必ず参れ。
(宇治拾遺物語：30-宇治 1220_07005)

清田(2014)は、(6)のように場所を示す代名詞として働く用法を「名詞用法」、(4)のように「NもソコソコにP」の形に代表して現れる「急ぐ様子」を示す用法を「状態副詞用法」、(5)のように数量詞に後接する用法を「接尾辞的用法」、第1節の(1)～(3)で示した評価を表す程度副詞としての用法を「程度副詞用法」、それらのいずれとも判断しがたいものを「曖昧用法」と分類し、時代ごとにまとめている。以下、表1は清田(2014)による用法ごとの用例分布である²(清田2014:p30表1より引用。ただし、筆者が体裁を一部変更した)。

表1 ソコソコの量的分布

	中古	中世		近世	近現代	現代	計
	コーパス	コーパス	抄物	コーパス	コーパス	コーパス	
名詞	32	7	19	16	1	1	76
状態				22	28	103	153
曖昧				48	5		53
接尾辞					24	114	138
程度					2	788	790
計	32	7	19	86	60	1006	1210

また、清田(2014)は表1の結果から、「そこそこ」の変遷過程を以下のようにまとめている。

(7) 名詞用法(中古) > $\left\{ \begin{array}{l} \text{状態副詞用法(近世)} \\ \text{接尾辞的用法(近代)} \end{array} \right\}$ > 程度副詞用法(現代)

これらの変遷過程を踏まえて、清田(2014)は「そこそこ」の程度副詞用法について、「状態副詞用法の、副詞用法として有する構文的特徴と、量的側面に言及するという接尾辞的用法の意味的特徴の支えのもとに成立した(清田2014:p34)」と言及している。

清田(2014)が提示する時代ごとの「そこそこ」の用法の分布は、筆者の調べと概ね一致しており、「状態副詞用法の、副詞用法として有する構文的特徴」「そこそこに」の形式が、程度副詞用法成立に寄与したという指摘についても異論はない。また、「量的側面に言及するとい

「接尾辞的用法の意味的特徴」が程度副詞用法「そこそこ」の意味を支えているという点についても、一定の理解はできる。一方で、程度副詞用法「そこそこ」には(8)(9)に見られるような、「質的側面」に関わる用例も少なくない。(8)は対象となる人物の「外見」、(9)は「話し手自身が納得できるほどの人物像」といった質的側面に言及するのに「そこそこ」を用いている。

(8) とびきりの美人ではないがそこそこ可愛く、真面目だが時として兄ゆずりのおっちょこちょいな一面を見せることもあった。(書籍：LBd9_00089)

(9) 私もまた、世の中の価値基準を批判しながら、その中でもそこそこの自分を示したいって思いは、きっとあったんだよね。(書籍：LBk3_00032)

また、接尾辞的用法の「そこそこ」は、話し手が「数量が大きい」と捉えている用例はほぼ見られない³のに対し(用例(10)(11))、程度副詞用法の「そこそこ」は、(12)(13)のように、比較的「程度量が大きい」と話し手が捉えていると考えられる用例も見られる。

(10) 目の前に立っている女は、どう見ても三十そこそこ、ひよっとしたら二十代でも通用するような美人だった。(5)再掲)

(11) アルバイトを必要とする者のなかで、現にアルバイトにありついている者がわずかに一割そこそこで、全体の七割近くが仕事を求めなければ食ってゆけない窮迫状態にあったのである。(書籍：LBi3_00062)

(12) 給料はほかの店並みで、もうひとつの仕事の分と合わせると、そこそこの額にはなる。(書籍：LBn9_00025)

(13) トヨタ車でコンパクトな車であればヴィッツが代表的だと思います。グレードも多数あり、中古もそこそこ出ていると思います。(知恵袋：OC06_03333)

このように、「接尾辞的用法」と「程度副詞用法」では、量を表す点では共通しているものの、「質的側面に言及し得るか否か」「示し得る程度量の大きさ」については異なると考えられる。また、清田(2014)には「評価(品定め)」という観点からの「そこそこ」における分析・考察は見られない。

そこで、第3節では各種用法の「①対象領域」「②基準の明示性」「③基準(価値観)における位置づけ」「④評価(品定め)のあり様」の4つの観点を中心に、その特徴をまとめる。

3. 各用法の特徴

本節では、「名詞用法」、「状態副詞用法」、「接尾辞的用法」「程度副詞用法」の4用法について、典型的な用例と周辺の用例をそれぞれ取り上げ、前節で示した4つの観点を中心に考察を加える。用例は現代日本語書き言葉均衡コーパス(BCCWJ)、新潮文庫の100冊によって採

取されたものを対象とする⁴。補足的に日本語歴史コーパス (CHJ) のデータも参照する。

3.1.名詞用法

名詞用法は、現代語ではほとんど用いられないが、中古から近世においては中心的な用法であった。この用法の「そこそこ」は、主に存在場所や着点を表す「に」格を取り、大まかな場所を指し示す機能を持つ。CHJによって採取された名詞用法の「そこそこ」29例のうち、「に」格を伴うものは21例(72.4%)に及ぶ。最も多く見られる形式が「に有り」を後接するもので7例見られた(用例(16))。また、「の+場所を示す名詞(山、河など)」を後接する用例が4例、断定の助動詞「なり」を後接する用例が3例、移動の方向を表す「へ」格をとる用例が1例見られた。典型的な形式としては「に格(+移動あるいは存在動詞)」をとり、その他、場所に関わる名詞や助詞をとる場合、断定形をとる形がこの用法に分類される。以下、CHJによって採取された用例について4観点から分析を試みる。

名詞用法「そこそこ」は、(14)(15)のように、「そこそこ」の直前に特定の場所を表す語句(「町の小路」「河内国」)が表れ、「その土地辺りを大まかに指し示す」ものもあれば、(16)(17)のように、場所を示していることは分かるものの、具体的な地理的名称・情報が明かされない用例もある。

- (14) 「内裏にのがるまじかりけり」とて出づるに、心得で、人をつけて見すれば、「町の小路なるそこそこになむ、とまりたまひぬる」とて来たり。(蜻蛉日記:20-蜻蛉 0974_00001)
- (15) 染着の心のいとどますますにおこりつつ、道心つくべくもはべらぬに、河内国そこそこに住むなにがしの聖人は、庵より出づることもせられねど、(大鏡:20-大鏡 1100_02010)
- (16) 大臣の云く、「思願ふ所何事ぞ」と。女霊の云く、「我れは其処其処に有し人也。生たりし時、帝王の召に依て、只一度懐抱したりき。(今昔物語:30-今昔 1100_14004)
- (17) 「昨日は西園寺に参りたりし」、「今日は院へ参るべし」、「ただ今は、そこそこに」など言ひ合へり。(徒然草:30-徒然 1336_01050)

いずれの場合も話し手が想定する「大まかな場所」を示す点、すなわち「話し手の心内における基準範囲の中」を「そこそこ」が表すという点では共通している。しかし、その指示対象の範囲(名詞用法の場合は、具体的な場所)は明示される場合もされない場合もあるといえる。受け手側に「そこそこ」によって表される具体的な場所を把握させることは必ずしも意図されないものと考えられる。また、名詞用法においては「そこそこ」によって表されるもの(場所)に対する話し手の評価(品定め)は存在しないものと考えられる。例えば、指し示そうとする場所が神聖であるかどうかなどによる共起制限はない。

以上より、名詞用法「そこそこ」は、意味的な「対象領域」が「場所」であり、その場所（話し手の基準範囲）は示される場合もそうでない場合もあるということを確認した。「評価（品定め）」という観点からすると、名詞用法においては存在しないといえる。

現代語における名詞用法「そこそこ」の用例出現率はわずかだが、BCCWJにおいては(18)に示す1例のみ見られた。

- (18) 日商はだいたいワードです。そこそこの商工会議所によりますが、どっちじゃないと駄目という決まりはありません。(知恵袋：OC04_00445)

「場所を示す」という点から、名詞用法と分類したが、(18)の「そこそこ」は「それぞれ（の場所における）」と解釈するのが自然だと思われる。「複数の場所」が想定されている点で、(14)～(17)に見られる中古から近世にかけての用例とは一線を画すものである。

3.2.状態副詞用法

状態副詞用法は、BCCWJにおける出現率は高くない（920例中25例、2.7%）。一方、新潮の100冊においては高い出現率（58例中24例、41.4%）を得た。時代の違いによる要因もあると考えられるが、文体差によるものの可能性もある。

状態副詞用法「そこそこ」は「NもソコソコにP」という形式で多く用いられる。対象としたデータベースの用例において、Nにあたる名詞は「挨拶（「別れ」、「こんにちは」なども含む）」が最も多く、次いで「食事（「朝食」、「昼食」なども含む）」が多く表れた（用例(19)(20)）。その他、「話」「着衣」などが散発的に見られたが、いずれにしても先行する名詞は、動作主の行動を表す語である（用例(21)）。

- (19) ミドリが来たときいはいもう発車の時刻が迫っていたので、挨拶もそこそこに食堂を出た。(新潮の100冊：『焼け跡のイエス・処女懐胎』)
- (20) はねられた人は重傷らしい。昼食もそこそこにヘルメットをかぶり、ミニパトカーに飛び乗って犯人の逃走が予想される塩狩峠のふもとにある検問所に急行した。(白書：OW1X_00342)
- (21) 星野が3本塁打を浴びて8失点。新エースに、との期待も大きかっただけに、打線の話もそこそこに監督は「十勝したんだけどな…。どうもエースとは言えません」と嘆いた。(新聞：PN1e_00003)

また、動作主の行動にあたる名詞を前接せずに、動作主の行動が「そこそこ」の後に示される(22)(23)のような用例も見られる。ただし、(22)の場合は「彼は勘定もそこそこに（すませ）、

あたふたと帰ってしまった」、(23)の場合は「昼食もそこそこに（済ませて）、キャビンへ戻る」といった言い換えが可能である。

- (22) ノレンのおとに手を出した客は、急にとんきょうな声を張りあげた。彼はそこそこに
勘定をすませ、あたふたと帰ってしまった。(新潮の 100 冊：『路傍の石』)
- (23) いよいよ、腹が据わる。そこそこに昼食を済ませて、キャビンへ戻る。
 (書籍：PB32_00210)

以上より、状態副詞用法「そこそこ」は、「N もそこそこに P」の形式をとる場合も、主体の行動が「そこそこ」の後に示される場合も、「主語の行動を表す名詞」をとり、その行動が「短時間のうちに済まされる」ことを示す用法であるといえる。よって、状態副詞用法「そこそこ」は対象領域として「(何かしらの行動に要する) 時間」をとり、その行動時間が「短い」ことを位置づける機能があると考えられる。ただし、実際の「行動」は示されていても、具体的な行動時間が明示される用例は存在しない。話し手の心内にある「通常ならこの程度の行動時間が想定される」という基準が前提にされているものの、それが文中に表れることはない。また、(24)のように物理的な時間の長さではなく、心理的な面で「通常想定される場合に比べて程度が小さい」ことを示す用例も存する。

- (24) 東京で下宿生活をしながら高校生活を送っていた私も、連日、授業もそこそこに友人の家に押しかけ、テレビ観戦しました。(ブログ：OY14_48952)

特別な状況でない限り、「授業」は話し手の都合によって短時間で切り上げられるものではない。(24)の表す「そこそこ」は、一般的に高校生に求められるような授業に対する「姿勢」や「熱意」といった心理的な面において「程度が小さい」ことを示していると考えられ、状態副詞用法の周辺的な用例であるといえる。

また、(25)(26)のように、主体の先行行動が名詞ではなく動詞述語による節によって示される用例も少数ながら見られた。この類の用例は、「先行の行動から後続の行動に移るまでの時間」が短いことを示すものと考えられる。例えば、(25)は「相談が極まる」から「休暇を貰い」までの時間が短いことを示し、(26)は「手ばやくからだをぬぐって」「浴衣をひっかけて出て来た」までの時間がわずかであることを「そこそこ」が示しているとよめる。

- (25) 相談が極まるとそこそこに、会社の方は十日間の休暇を貰い、大森の家に戸じまりをして、月の初めに二人は鎌倉へ出かけました。(新潮の 100 冊『痴人の愛』)
- (26) 「一枚買わしておいてくれ」と、いいながら手ばやくからだをぬぐって、そこそこに

浴衣をひっかけて出て来たのだった。(書籍：LBh9_00045)

ここから、典型的には、「そこそこ」の前後に現れる名詞（動作）そのものの「(話し手の判断による) 行動時間の短さ」を示すものの、周辺の用例として心理的な程度の低さを表す場合や、ある動作からある動作へ移行するまでの時間が短いことを示す場合もあるということがわかる。

また、主に「時間」の「短さ」を表す状態副詞用法の「そこそこ」は「その行動が満足に実施されないことへの不満」へとつながる可能性も考えられるが、用例を見る限り、話し手の不満などのマイナスの評価が表れるものは取り立てて多くない。(27)のような「～てしまう」の表現が数例見られるのみである。

(27) ノレンのおとに手を出した客は、急にとんきょうな声を張りあげた。彼はそこそこに
勘定をすませ、あたふたと帰ってしまった。(22)再掲)

以上より、状態副詞用法における「そこそこ」は「時間」を「対象領域」として、話し手の心内にある「通常想定される行動時間」を基準に「短さ」を示すものであることを確認した。また、話し手の基準で「短さ」を示しているものの、その短さに対する話し手の「評価(品定め)」は感じられにくいことを確認した。

状態副詞用法は、「先行行動 N もそこそこに P (後続行動文)」を典型形式としながら、「すます」に代表される終了動作の場合には「そこそこに行動 N をすませ、後続行動文」という構造(用例(22)(23))をとる場合も少なくなく、「先行行動節、そこそこに後続行動文」という構造(用例(25)(26))もとる。意味としては、話し手の判断による「(通常想定される行動時間と比較した場合の) 行動時間の短さ」を表す場合が大半を占めるが、中には(24)のように心理的な側面における程度の小ささを表す場合もある。

3.3.接尾辞的用法

接尾辞的用法は現代語においても比較的多く用いられている。BCCWJ から採取された用例の分類では、920 例中 181 例 (19.7%) を得た。

ここに分類される用例は、「数量+そこそこ」の形式を持ち、それ以外の形式は見られない。また、名詞用法が「場所(空間)」を、状態副詞用法のほとんどが「時間」を対象領域として持つのに対し、接尾辞的用法は「数による測定が可能であるもの」であれば様々な事柄について示すことができる。ただし、特に共起しやすい領域があり、最も多いものは「年齢」(181 例中 81 例、44.8%) であり、次いで「身長」(181 例中 18 例、9.9%) という結果となった。

- (28) そこで大黒を紹介してもらい、取材の協力を頼むと中山勝正をつけてくれた。未だ
二十歳そこそこの、初々しさが残る青年だった。(書籍：LB13_00059)
- (29) わずか五十歳そこそこで、もう完全にボケている。(書籍：PB22_00167)
- (30) ドアが細目に開き、若い東洋人の男が顔を出した。なるほど、えらく小柄だった。
百五十センチそこそこしかなかった。(ベストセラー：OB2X_00299)

接尾辞的用法の「そこそこ」は、前に見た名詞用法・状態副詞用法とは異なり、話し手の想定する基準が「数値」の形で必ず明示される。(28)～(30)は、それぞれ「二十歳」「五十歳」「百五十センチ」という基準が示されており、「そこそこ」が「その数値をわずかに超えている程度」を位置づけていることがわかる。

明示される数量詞の近辺を指し示すという機能だけであれば「約、およそ」などの概数を表す語と類似すると考えられるが、「そこそこ」は単に概数を表す役割を担うだけでない。「話し手の基準から判断したときに、その数値が小さい」ことを示す機能をもつ。「話し手の基準」と照らし合わせた結果であるため、基準となる数値自体が小さいものであるとは限らない。(28)(29)からも分かるように、年齢を表す場合、「二十歳そこそこ」も「五十歳そこそこ」も問題なく使用できる。ただし、基準となる数値の客観的な大きさに関わらず、「話し手の心内基準で捉えたときにその数値が小さい」ということが前提となっている。(28)の場合は「未だ」、「初々しさが残る」、(29)の場合は「わずか」という語と共起していることから、「二十歳そこそこ」も「五十歳そこそこ」も同様に、話し手の心内基準から見て数値が小さい(若い)ものであることがわかる。基準となる数値を「わずかに超える」ことを示すと同時に、話し手による「基準となる数値が小さいという前提」をも表すのが接尾辞的用法の「そこそこ」である。

話し手の前提とする基準と比較して「小さい」ことを示す点では、状態副詞用法と接尾辞的用法は共通の意味特徴をもつといえる。一方で、状態副詞用法の用例には「そこそこ」以外の「程度の小ささ(短時間であること)」を示すための標識となるような言語表現が現れないのに対し、接尾辞的用法の場合は、「話し手がその数値を小さいとみなしている」ことを示す言語表現がたびたび共起するという異なりがある。(28)～(30)の場合、「未だ」「わずか」「しか」がそれにあたる。状態副詞用法の場合は、「*挨拶も短時間でそこそこに出かけた」や「*食事も急いでそこそこに寝床に入った」などのように、「そこそこ」の示す領域を補強するような語(「短時間」、「急ぐ」など)が共起する用例は皆無である。また、現代語の接尾辞的用法には(31)に示すような、「話し手の基準から見てその数値が大きいことを示す」例外的な用例が見られた。

- (31) その頃おいくつだったか知りませんが、相手のお爺さんは、どう考えたって
七十そこそこ。そんなお年で色恋が出来るもんなんですか(書籍：LBe9_00127)

「そんなお年」という表現から、話し手にとって「七十そこそこ」が高齢であることが分かる。例外的な用例は(31)の1例のみであったが、「数値が小さいことを示す別の語と共起しやすい」ということから、接尾辞的用法「そこそこ」は状態副詞用法「そこそこ」と比較した場合、「程度の小ささ」を示す機能がやや弱いと考えられる。「話し手の心内における基準が明示的に示され、その基準をわずかに超える」という具体的な位置づけが可能である一方、「その程度が小さい」ことを示す機能は状態副詞用法に比較し弱い（他の語による補強を必要とする場合が多い）。

また、接尾辞的用法は「話し手基準」で「示された数が小さい」ことを表しはするが、「数が小さい」ことに対して「評価（品定め）」は行われぬ。

(32) そこで大黒を紹介してもらい、取材の協力を頼むと中山勝正をつけてくれた。未だ二十歳そこそこの、初々しさが残る青年だった。((28)再掲)

(33) わずか五十歳そこそこで、もう完全にボケている。((29)再掲)

文全体を見ると、(32)は肯定的な文脈、(33)は否定的な文脈に受けとれる。しかし、それらのプラス／マイナスイメージは「そこそこ」が用いられることによって生じるものではない（「そこそこ」を取り除いた文においても、文全体の是非のイメージは変化しない）。

接尾辞的用法の「そこそこ」を用いる文脈では、話し手による基準が明示され、それに対する位置づけ（基準をわずかに超える）も明確に規定されるが、その事実（実際の数値と、その数値を話し手が小さいとみなしていること）に対する「評価（品定め）」は行われぬといえる。また、状態副詞用法と比較すると、話し手の「基準とする数値が小さいことを示す」機能はやや弱いことも明らかとなった。

3.4.程度副詞用法

程度副詞用法は現代語において最も使用率が高い。BCCWJによる用例検索の結果、「そこそこ」の全用例 920 例のうち、程度副詞用法をとる用例は 705 例（76.6%）であった。この用法は、その他の用法に比べ統語的な制約が少ない。第1節で示した通り、程度副詞ながら連体修飾語や述語としても用いられる。(34)は形容詞を修飾する用例、(35)は動詞を修飾する用例、(36)は連体修飾格「の」を伴い名詞を修飾する用例、(37)は述語として働く用例である。

(34) 北信太駅を降りてすぐ案内板もあったし、難なく葛葉稲荷を見つけることができた。

鳥居はそこそこ大きいのが、京都、奈良の名だたる神社仏閣に比べると、なんともこぢんまりした神社だった。（書籍：PB29_00026）

(35) ピアスは、海軍でこれより上位に昇格することはないと承知していながらも、今の地

位にそこそこ満足している。(書籍：LB19_00088)

- (36) とにかく薄味。濃味だったら合格点だったんですけどねえ〜。まあ、値段を考えれば、そこそこのクオリティでした。(2)再掲)
- (37) 背も高く容姿もそこそこだったが、そこに映った自分の姿は、やはりどう見ても少し疲れた顔をした若いサラリーマンにしか見えない。(3)再掲)

名詞用法であれば「場所」、状態副詞用法であれば「時間(の長さ)」、接尾辞的用法であれば、年齢や身長に代表される「数値による測定が可能なもの」が「そこそこ」の対象領域であったが、程度副詞用法の場合は「程度量の幅が規定されるあらゆる事柄」を対象領域とする。しかし、接尾辞的用法のように、話し手が規定する「明確な基準」が示されるわけではなく、状態副詞用法のように、話し手の心内にある基準と比較し「程度が小さい」ことを示す機能が内包されると考えることもできない。例えば、以下の(38)(39)はいずれも話題としている事柄の値段について言及したものだが、(38)は「値段がある程度高い(大きい)こと」を示すのに(39)は「値段がある程度安い(小さい)こと」を示すのに「そこそこ」が使用されている。

- (38) 男性用セカンドバッグなんかは、オクでも思ったより値が付かないようです。最近のモノで未使用・美品なら、そこそこの金額はいきますけど。(ブログ：OY15_20060)
- (39) 土曜は混み合っているので二時間制とかになります但其のあと他へ行けるし、駅から近いし、値段もそこそこだし、ぐるなびにクーポンついてますし。(知恵袋：OC08_07180)

このように、程度副詞用法「そこそこ」では一見すると、話し手の心内基準における「位置づけ」が高い場合と低い場合が混在するように思われる。

しかし、「評価(品定め)」の観点から(38)(39)を見ると、共通点が見出される。どちらの用例にも、話し手による肯定的な含意が見られる点である。(38)の場合、話し手は「品物を売る側の立場」から発言しているため、商品が「高値であること」が期待されていると考えることができる。一方、(39)の場合は、話し手が消費者側の立場から発話しているため、値段が「安値であること」が期待されるだろう。(38)の「そこそこ」は「値段がある程度高いこと」を、(39)の「そこそこ」は「値段がある程度安いこと」を示しているので、どちらも話し手にとって期待される結果が「そこそこ」によって表されていると捉えられる。程度副詞用法の場合は、話し手の「肯定的な評価」が数値的側面を支えているといえる。

しかし、「肯定的な評価」といっても、「そこそこ」で示される話し手の評価は際立って高いものではない。(38)の場合は「基本的には思ったより値がつかない」状況が前提にあり、「最近のもので未使用・美品」ならば(悪条件ながら)「そこそこの金額」になると表現されている。(39)の場合も、「土曜は込み合っているので二時間制になる」という話し手にとって都合の悪い

側面を抱えながらも金銭的な面を見ると「値段もそこそこ」と評価しているのである。(34)～(37)についても同様である。いずれも「そこそこ」の先行文脈あるいは後続文脈に話し手にとって不都合な側面(「こじんまりした神社」「上位に昇格することはない」「(濃い味を望んでいたのに)薄味」「少し疲れた顔をした若いサラリーマン」)がありつつも、別の側面から見ると「何とか肯定される」、いわば「許容できる」といった評価が「そこそこ」にあると考えられる⁵。接尾辞的用法「そこそこ」は、話し手の設定する基準(数値)を「わずかに超える」ことを確認したが、程度副詞用法においては、話し手の設定する「許容できる基準」を「わずかに超える」位置づけがなされる(許容のラインを大きく超えることはない)といえる。

なお、程度副詞用法「そこそこ」は、大半が上述した「(話し手が納得できる基準をわずかに超えるという)許容」の意味として認められるが、中には(40)(41)のように話し手にとってマイナスの評価と捉えられる事柄に対して用いられる用例や、(42)(43)のようにマイナスの語を修飾する用例も、出現率としては高くないものの存在する。(40)(41)に見られる「そこそこ」がマイナスの評価で使用されていると捉えられる用例は9例(1.3%)、(42)(43)に見られるマイナスの語を修飾する用例も9例(1.3%)見られた。

- (40) クエ進行したいキャラ達が、あんまり習得が進んでなかったり装備もそこそこだったりのものもあって、ある意味ちょうどいい緊張感と強さでしたね。(ブログ：OY15_15403)
- (41) お金に困っている人や、困ってはいなくてもそこそこの収入しかない人は、たいていの場合お金に動かされるままになっている。(ベストセラー：OB5X_00197)
- (42) わずかですが、損を挽回し儲けてるひといます。大半は、大損して撤退するか、そこそこの損で撤退するかです。バブル期は株を持ってれば、勝手に上がりましたが、今はむしろ下がります(知恵袋：OC03_01868)
- (43) 個人差はあると思いますが、そこそこ痛いですよ。我慢できないほどってわけではないですが。(知恵袋：OC09_02485)

(40)は、「そこそこ」の先行文脈に「あんまり習得が進んでいなかったり」とあることから、「装備もそこそこ」は話し手にとって「肯定的には捉えられない程度」を指していると考えられる。(41)も「そこそこの収入しかない」という表現から、話し手の収入が、肯定的に捉えられるほどのものではないといえる。どちらの用例においても甚だしく低い評価ではないものの、「話し手が納得できる程度を超えている」とは判断しがたい。ただし、(41)では先に「お金に困っている人」を取りあげ、その段階と比較して一段上の収入レベルとして「そこそこの収入しかない人」を挙げている。(40)も、後続文脈に「ある意味ちょうどいい緊張感と強さ」であったとしていたことから、「装備」のレベルは十分でなかったにしろ、最低限のレベルには達して

いたものと考えられる。「許容できる（ほど一定程度に高い）基準」が設けられる典型例とは違うものの、(40)(41)に類する用例にも「最低限の基準（明らかに許容できないほどではない一定の水準）」と呼べるような、低く見積もられた基準については「わずかに超える」という位置づけが存すると考えられる。

また、(42)は「損」、(43)は「痛い」というマイナスの語を修飾しており⁶、「そこそこ」がより否定的な意味で用いられているように見える。しかし、これらの用例においては「そこそこ」自体が話題となる事柄に対してマイナスの評価を付与しているのではなく、「修飾語の程度を規定する」機能が中心となって働いていると捉えるのが自然だろう（むしろ、(42)(43)の「そこそこ」は「損」や「痛み」のレベルをやや抑えているようにも感じられる）。例えば、(42)の場合は「大損」と比較したときの「それほど大きくはないが、ある一定の基準を超えた損」、(43)の場合は、「我慢できないほどの痛み」と比較したときの「それほど強くはないが、ある一定の基準を超えた痛み」を「そこそこ」で位置づけている。(40)(41)と同様に、(42)(43)のようなマイナスの評価語を修飾する用例も「示された基準」を「わずかに超える」という位置づけ方は共通しており、「許容できないほどではない」という意味（(42)であれば一応許容はできるほどの損、(43)であれば一応許容できる程度の痛み）をもつと考えられる。

以上より、程度副詞用法「そこそこ」は、「許容」という話し手のプラスの評価性が前提となり「その前提となる基準をわずかに超える」位置づけが行われる用例を典型としてもち、周辺的なものに「良くはないものの最低限度の基準はわずかに超える」ことを示す用例や、マイナスの修飾語（という基準）を「わずかに超える」位置づけを行う用例があることを確認した。話し手の心内にある基準と比較し、それを「わずかに超える」位置づけを行うという点で、接尾辞的用法と程度副詞用法は共通の特徴をもつと考えられる。一方、接尾辞的用法においては「基準が明示的」であり、「是非の評価をもたずに、話し手の『程度が小さい』という見方のみを表現する」のに対し、程度副詞用法では、「許容」という（主にプラスの）評価を前提とした基準が暗示的に（直接的な基準値として表現されずに）存するという点で違いがある。ただし、「～しかない」などの否定的な文脈と共起する場合やマイナスの評価語を修飾する場合は、「許容」の評価性が薄れ、「最低限のレベル」や「基準（マイナスの修飾語）」を「わずかに超える」という、より接尾辞的用法に近い機能を持つ（ただし、その場合も「何とか許容できる程度である」という意味は残る）。これらの用例は、プラスの評価で用いられる用例と比較し出現率がわずかであることから（程度副詞用法全用例のうち 2.6%）、周辺的な用例と考えられる。

4. まとめ

第3節で述べてきた各用法における「①対象領域」「②基準の明示性」「③基準（価値観）における位置づけ」「④評価（品定め）のあり様」の4つの観点について、以下の表2にまとめる。

表2 各用法の特徴

	対象領域	基準の明示性	位置づけ	評価
名詞用法	場所	任意	基準範囲内または 基準範囲周辺	なし
状態副詞用法	時間	なし（暗示的）	話し手にとって、 動作の行動時間が短い	なし
接尾辞的用法	数値で表現 可能な事柄	あり（数値が必須）	基準をわずかに超える ※基準は話し手にとって 小さいものである	なし
程度副詞用法	量・程度・質	なし（暗示的）	基準をわずかに超える	許容

「対象領域」については、名詞用法では「場所」、状態副詞用法では「時間」に限定されるが、接尾辞的用法になると数値で表現可能な事柄は（偏りは認められるものの）基本的にはすべて対象にもつようになり、程度副詞用法では質的・程度的な事柄もとり得るなどさらに拡大する。この対象領域の拡大は、現代語の用例出現率の増加に比例しているように思われる。

「基準の明示性」については接尾辞的用法では必須の要件となるが、そのほかの用法においては、必須ではないか、暗示的である。ただし、暗示のされ方は用法ごとに異なる。名詞用法では、そもそも受け手に基準（場所）を特定させないことが意図されるのに対し、状態副詞用法では「通常想定される行動時間」を前提としている。典型的な程度副詞用法の場合は「許容」という評価の支えのもと、話し手の基準を（明確でないものの）受け手に悟らせるように表現されている。「話し手の心内基準を受け手が共有できていることが期待される」という面から見れば、状態副詞用法と程度副詞用法は「基準の明示性」の観点で共通の特徴をもつといえる。

「基準に対する位置づけ」に関しては、接尾辞的用法と程度副詞用法が「基準をわずかに超える」という点で共通している。ただし、「基準をわずかに超え」た結果に対する話し手の捉え方は両者で異なる。接尾辞的用法の場合は、話し手にとって「結果として導き出される数値が小さい(小ささに対する良し悪しの判断は存しない)」ことを表現する機能を担っている。一方、程度副詞用法の場合は「程度の小ささ」を示す機能よりも、「結果が許容できるものである」という「評価」が、「そこそこ」で表される中心的な意味である。接尾辞的用法と程度副詞用法は「話し手独自の観点が介入し、基準が設定される」という点で、他の用法間よりも関連性が強く思われるが、「小さい」という事実認識の伝達を主としているのか、「許容できる」という話し手の感情に関わる評価の伝達を主としているのかという点で、意味的に対立している。

以上より、現代日本語において中心的な用法である「評価を表す程度副詞」としての「そこそこ」の意味的特徴は、「許容」の評価ができる一定の基準が話し手の心内にあることを前提に、その基準をわずかに超える位置づけを示すものであると考えられる。

「基準をわずかに超える」という位置づけ方は接尾辞的用法と連続的である。また、「示される語を（そうと認められる程度に）かろうじて上回る」という点は、状態副詞用法とも関連する。状態副詞用法は、主体の動作が短時間で済まされる様子を表すが、見方を変えると「ある名詞（動作）が、その名詞として成立する程度にかろうじて実施される」とも捉えられる。例えば、「食事もそこそこに出かける」であれば、「通常想定されるほど十分ではないが、一応『食事』として成立する程度にかろうじて行われる」との解釈が可能である。ここから、現代語「そこそこ」は「ある基準をわずかに（かろうじて）超える」語彙的意味を中核にもち、動作を表す名詞を伴う場合は状態副詞用法、数量を基準とする場合は接尾辞的用法、スケールをもつ語を修飾したり、事柄の程度量を規定する述語となったりする場合は程度副詞用法として用いられるといえる。程度副詞用法がもつ「許容」の評価性は、「そこそこ」の中核的意味である「基準をわずかに超える」という意味特性が「スケールをもつ語に対する修飾」として使用されることによって生じたものであろう。ただし、程度副詞用法が「ある一定基準を超えて悪い」というマイナス評価になりやすく、「許容される一定基準をわずかに超える」というプラス評価を中心にもつ要因については詳細を述べるに至らなかった。この点は、今後の課題としたい。

注

- (1) 田和（2017）では「評価を表す程度副詞」の統語的特徴として「派生的な連体修飾用法・述語用法を持つ」ことを挙げている。本稿(2)は「の」を伴った連体修飾用法、(3)は述語用法と捉えられ、この特徴と一致する。
- (2) 清田（2014）は、中古～近世には「日本古典文学大系」を対象にした国文学研究資料館データベースと「新編日本古典文学全集」を対象としたジャパンナレッジを、近現代には「CD-ROM版 明治の文豪」と「CD-ROM版 新潮文庫の100冊」を、現代語には「現代日本語書き言葉均衡コーパス」を使用してデータ収集を行っている。
- (3) ただし、「数量が大きい（と話し手が捉える場合）」の用例もわずかながら（1例）見られた。
- (4) BCCWJ、CHJにおいては、それぞれ語彙素読み「ソコソコ」で検索した結果得られた用例を対象とした。検索結果はBCCWJでは920例、CHJでは78例であった。新潮の100冊では、「そこそこ」をキー検索することで用例を採取した。得られた用例は58例である。
- (5) 程度副詞用法における「そこそこ」は、話題となる事柄について「不都合な側面」がありつつも「許容できる」ことを示すものであるため、「（不都合な側面）だが、そこそこ～だ」「そこそこ～だが、（不都合な側面）」といった逆接表現を文中に伴う用例が多く見られる。「そこそこ」を含む文中に現れる逆接表現について調査したところ、用例(35)に見られる「…だが、そこそこ～だ」の形は98例、用例(34)(37)に見られる「そこそこ～だが、…」の形は104例見られた。両者を合わせると202例となり、程度副詞用法全体の用例数（705例）の28.7%にあたる。また、前後の文も含めた逆接表現との共起も加えるとさらに割合は高くなりそうである（例えば、用例(36)は「そこそこ」が用いられる文の前文文末に「けどねえ～」という逆接表現が見られる）。逆接表現の出やすさは、程度副詞用法「そこそこ」の「許容」の意味を支えるのに大きく関連すると思われるが、現段階の調査における「文中で逆接表現が使用される割合28.7%」が他の語と比較し有意に高いとは断定できないため、調査結果に触れるに留める。分析・考察については別稿に改めたい。また、「不都合な側面」は、必ずしも逆接表現を伴って明示されるとは限らないため、逆接表現を伴わない用例における「許容」の表れ方についての詳細な記述も今後の課題としたい。
- (6) 程度副詞用法「そこそこ」が修飾するマイナスの評価語には、「損」「痛い」の他に、「悪い」

「グロい」「面倒な」「危険な」「悩む」「(ストレスが)溜まる」「おかしくなる」が見られた。品詞は限定されないが、いずれも他の程度副詞との共起も自然な「スケールを伴うタイプ」の語であるといえる。

参考(引用)文献

清田朗裕(2014)「ソコソコの語史」『筑紫日本語研究』2013 筑紫日本語研究会,pp25-35

工藤浩(1983)「程度副詞をめぐって」『副用語の研究』,pp176-198

鈴木夕佳(2011)「配慮の機能をもつ副詞についての考察—「そこそこ」を中心に—」『日本語コミュニケーション論集』(1),日本語コミュニケーション研究会,pp82-89

疏蒲剣(2018)「現代日本語における程度副詞の研究」名古屋大学,博士論文(文学),甲第 12195号

田和真紀子(2017)『日本語程度副詞体系の変遷—古代語から近代語へ』,勉誠出版

仁田義雄(2002)『副詞的表現の諸相』,くろしお出版

渡辺実(1990)「程度副詞の体系」『上智大学国文学論集』(23),pp1-16

例文出典

- ・ 国立国語研究所『現代日本語書き言葉均衡コーパス』(pj.ninjal.ac.jp/corpus_center/bccwj) (コーパス検索アプリケーション『中納言』Ver2.4を使用、最終閲覧日2020年3月8日)
- ・ 国立国語研究所『歴史コーパス』(pj.ninjal.ac.jp/corpus_center/cmj) (コーパスアプリケーション『中納言』を使用、最終閲覧日2020年3月9日)
- ・ CD-ROM版 新潮文庫の100冊

【収録作品】

『羅生門／鼻』、『小さき者へ／生れ出づる悩み』、『山本五十六』、『砂の女』、『華岡青洲の妻』、『女社長に乾杯!』、『青春の蹉跎』、『焼跡のイエス／処女懐胎』、『黒い雨』、『野菊の墓』、『歌行燈／高野聖』、『あすなる物語』、『一握の砂／悲しき玩具』、『ブンとフン』、『風に吹かれて』、『剣客商売』、『沈黙』、『野火』、『死者の奢り／飼育』、『雪国』、『檸檬』、『パニック／裸の王様』、『楡家の人びと』、『聖少女』、『モオツァルト／無常という事』、『一瞬の夏』、『小僧の神様／城の崎にて』、『破戒』、『国盗り物語』、『コンスタンティノーブルの陥落』、『新橋烏森口青春篇』、『太郎物語』、『痴人の愛』、『人間失格』、『ビルマの豎琴』、『新源氏物語』、『冬の旅』、『二十歳の原点』、『二十四の瞳』、『エディプスの恋人』、『こころ』、『李陵／山月記』、『孤高の人』、『アメリカひじき／火垂るの墓』、『放浪記』、『にぎりえ／たけくらべ』、『草の花』、『若き数学者のアメリカ』、『風立ちぬ／美しい村』、『人民は弱し官吏は強し』、『点と線』、『銀河鉄道の夜』、『金閣寺』、『人生論ノート』、『忍ぶ川』、『雁の寺／越前竹人形』、『塩狩峠』、『錦繡』、『友情』、『世界の終りとハードボイルド・ワンダーランド』、『山椒大夫／高瀬舟』、『路傍の石』、『さぶ』、『遠野物語』、『砂の上の植物群』、『戦艦武蔵』、『花埋み』、『絵のない絵本』、『人形の家』、『十五少年漂流記』、『O・ヘンリ短編集』、『変身』、『異邦人』、『ティファニーで朝食を』、『沈黙の春』、『若きウェルテルの悩み』、『悲しみよ こんにちは』、『ハムレット』、『狭き門』、『長距離走者の孤独』、『古代への情熱』、『ジーキル博士とハイド氏』、『赤と黒』、『怒りの葡萄』、『桜の園／三人姉妹』、『はつ恋』、『クリスマス・カロール』、『罪と罰』、『アンナ・カレーニナ』、『シャーロック・ホームズの冒険』、『トム・ソーヤーの冒険』、『チップス先生さようなら』、『嵐が丘』、『グレート・ギャツビー』、『車輪の下』、『黒猫／黄金虫』、『トニオ・クレーゲル／ヴェニスに死す』、『女の一生』、『赤毛のアン』、『月と六ペンス』